

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二12:11~18 「私が求めているのは」

[11]「私は愚か者になりました。あなたがたが無理に私をそうしたのです。私は当然あなたがたの推薦を受けてよかったです。たとい私は取るに足りない者であっても、私はあの大使徒たちにどのような点でも劣るところはありませんでした」

パウロはコリント教会の人々によって真の使徒として、歓迎され、推薦されてよかったです。なのに実際は彼らはそうしなかった。またにせ教師たちは自分たちのことを「大使徒」と自称していたが、パウロは皮肉をもって「…私はあの大使徒たちにどのような点でも劣るところはありませんでした」と言う。

[12]「使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間で行われた、しるしと不思議と力あるわざです」

これは「使徒の働き(特に13章以下)」を読めばよくわかる場所である。

[13]「あなたがたが他の諸教会より劣っている点は何でしょうか。それは、私のほうであなたがたには負担をかけなかったことだけです。この不正については、どうか、赦してください」

パウロはコリントにおいては自給自足で伝道した。この町の特殊性を考えて彼はこのような方法を取ったのであろう。彼はそのことを「不正」と言い、「どうか赦してください」と言うが、これは不正でもなければ謝罪することでもない。しかし、このような表現をすることによって彼がコリント人たちを気にかけて、愛しているということがよくわかる。

[14]「今、私はあなたがたのところに行こうとして、三度目の用意ができています。しかし、あなたがたに負担はかけません。私が求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身だからです。子は親のためにたくわえる必要はなく、親が子のためにたくわえるべきです」

パウロのコリント訪問は一度目は使徒18章の第二回伝道旅行の時。二度目はあの「涙ながらの手紙」(2:4)を書かなければならなかった悲しみの訪問。三度目はこれから行こうとしている訪問。そして今回も彼は経済的負担をかけようとはしない。彼がコリント人たちから求めているのは金銭的報酬ではなく、彼ら自身であった。彼はコリント教会の人々と会い、交わり、共に主にある喜びを分かち合いたいと思っている。彼はコリント人たちが霊的に成長していくことを願ってあらゆる努力をしている。まさに親が子のためにたくわえ、守り育てるようである。

[15a]「ですから、私はあなたがたのたましいのためには、大いに喜んで財を費やし、また私自身をさえ使い尽くしましょう」

ここに愛する人々のためには惜しみなく与える人の姿がある。これはまた神がキリストによって示してくださった愛の姿でもある。→ローマ5:6~8

[15b-16]「私あなたがたを愛すれば愛するほど、私はいよいよ愛されなくなるのでしょうか。あなたがたに重荷は負わせなかったにしても、私は、悪賢くて、あな

たがたからだまし取ったのだと言われます」

誤解、偏見は世の常であるが、パウロの愛の行為を何か下心があるのではないかと考える人々がいた。こういう人々は物事を悪いように悪いように考え、それに沿った言動をする。パウロはこれをどのような思いで聞いたのであろう。彼は心が張り裂けそうになったのではないだろうか。

[17-18]「あなたがたのところに遣わした人たちのうちだれによって、私あなたがたを欺くようなことがあったでしょうか。私はテトスにそちらに行くように勧め、また、あの兄弟を同行させました。テトスはあなたがたを欺くようなことをしたでしょうか。私たちは同じ心で、同じ歩調で歩いたのではありませんか」

パウロが彼らを欺いているというような事実を彼らは見つけることはできないはずである。一番最近ではテトスを「あの兄弟」(8:18)と言われる兄弟を同行させた。その時テトスはあなたがたを欺いたかとパウロは問う。答えはもちろん否である。そして、テトスをよく知っているあなたがたであれば、テトスと同じ心情で歩んでいる私についても正しく理解できるはずではないかと言うのである。

パウロを誤解し中傷するコリント人たちはこのことをよく考え悔い改めなければならない。パウロが求めているのは、金銭や物質的見返りなどではなくコリント人自身なのである。パウロは彼らが信仰的に成長し神のみこころにかなった歩みができることをひたすら願っている。彼らはパウロのこのような愛の訴えに応じて心を開くべきなのである。

さらにこの箇所から教えられることは、すべてのクリスチャンも偏見や思い込みなどではなく、人と神とに対して正しく心を開いて神のみこころにかなった歩みをして生きなければならないということである。